

# シンガポール報告

櫻井 郁男（シンガポール日本人幼稚園園長）

## 3月22日

羽田発のANA NH841 便は4組6名の乗客を乗せ、定刻にチャンギ国際空港に到着した。この時は出国及びシンガポール入国時の健康観察は、コロナ禍以前と変わらず、モニターでの体温チェックのみであった。しかし、コロナ感染防止対策により14日間のホテル又は住居での健康観察策が実施された直後であった。そこで、前園長は私の到着を待たず、3月22日の朝便で帰国の途につき、私は空港から前任者の住居に直行した。

## 14日間のコンドミニアム(入居先)待機

事前に沢山の食材が冷蔵庫にストックされていたので、自炊生活で入居作業にあたった。毎日不規則の時刻に、保健省の担当者より「LINE」での所在確認と健康チェックがあった。コロナ感染の症状は皆無であったが、運動不足と24時間のエアコンのためか、体調を崩し、後半の4泊5日は緊急入院となった。

## 新年度全員出勤日

全員出勤日（4月6日）の午後に外出許可が下り、早速教職員が待つ園に出勤した。ところがその前日、政府より「2日後に全ての学校・幼稚園等を閉鎖せよ」との指示が出ていた。出勤可能な者は施設の維持管理に必要な数名で、1日に数時間とのこと。このため、赴任の挨拶もそこに、在宅勤務時の業務分担をしたのみで、約2か月間のリモートワークが始まった。

## Zoom You Tube LINE

当園は2歳児から5歳児までを保育・教育をする幼稚園である。そもそも保護者の育児負担軽減も求められている園が、子どもに電子データを送ったところで、保護者の育児軽減にはならないだろう、との戸惑いもあった。しかし、国内と異なり共働き家庭は少ないので、まずは試しと、動画配信を試みた。

朝の会・歌・踊り・マジック・読み聞かせ・体操・折紙・似顔絵の課題・・・子どもたちは、まだ見ぬ担任からの働きかけを楽しみに過ごした。時を同じくして、保護者の多くも在宅勤務となり、子供たちとコンピューターの使用順で苦勞する家庭もあった。

開園までの約2か月間、経営会議と運営企画会はZoom、教材研究はLINE、動画配信はYouTubeを活用した。現地校は5月より夏休みを先取りし、インター校の多くは当園と同様の対応をしていた。

## 子どもがいない・教師が来ない

前述のように各校は工夫を重ね「保育・教育活動」を保障していたが、学校によっては、学ぶ主人公が不在であった。日系の高等学校では、春休みに一時帰国や海外旅行をしていた生徒の多くはシンガポールに戻れず、日本に留まりオンラインでの学習を余儀なくされた。教員も同様で、シンガポール日本人学校では、4月赴任予定教員が来星し、勤務を始

めたのは7月中旬からであった。当園は新卒教員の採用であり、4月からのビザ発給が滞り、9月中旬の来星、10月からの勤務となった。(全世界の日本人学校派遣者はさらに赴任が難しいとの報告もある「全国海外帰国子女教育・国際理解教育研究協議会」)

当園における4月当初の在星園児数は3分の2ほどであり、一時帰国をしていた子どもたちや、4月入園予定児の多くは国内にとどまっていた。なお、12月末の在籍は前年比20%減である。この理由として、単身赴任が増えたことや、未だに入国時のPCR検査と指定ホテルでの14日間の健康観察があり、子どものストレスを考慮し躊躇していると考えられる。

### 6月2日、フェーズ「1」

感染状況が静まり、フェーズ「1」(規制解除の段階で「2」「3」と緩くなる)となった。シンガポールの教育機関はこの日より再開が許可され、当園は6月3日に開園した。

開園に先立ち、幼児の保育・教育に携わる60000人の教職員はPCR検査を義務付けられた。郊外の駅に集められ、シャトルバスでスポーツ公園にある体育館にピストン輸送された。此処で検体を採取され、6名まとめて検査をした。6名中1人でも異常があれば、各々が再検査を受ける仕組みとのこと。効率的な方法ではあると妙に納得した。(無料)

園再開の条件となる規制を以下に示す。

登園時の体温チェック 手指の消毒 マスクの着用(食事・運動時・お昼寝以外) 保護者の園内立ち入り禁止 他のクラスとの交流禁止 教職員や園児同士の接触禁止 担任・アシスタント教員以外の保育室(教室)立入禁止 給食当番の自粛 砂場・プールの使用禁止 園外での活動禁止 手すりや遊具・玩具の消毒 他クラスとの絵本共有禁止等、みんなで一諸にとの活動は全て規制された。

### 6月18日、期待していたフェーズ「2」

しかし幼稚園等に関する規制緩和は、5名以内での敷地外散策のみであった。この背景は、コンドミニアム内の室内空間のみで運営している小規模施設に配慮した措置であり、広大な敷地を擁する当園には、なんのメリットもなかった。



6月に園の活動は再開されたが、感染を避けた結果、下記に示す多くの行事は中止、又は規模を縮小し、保護者の参加も遠慮(禁止されている)していただくこととなった。

入園式→園内放送	始園式→園内放送	親子遠足→中止	お泊り保育→夕涼み会
夏祭り→縮小→保護者には動画配信	保護者会→中止	個人面談→電話面談	
作品展→各クラスに展示しクラスごとに見学→保護者には動画配信			
ステージ発表会→動画配信→観客(園児も)無し			
遠足→中止	卒園遠足→中止	運動会→クラスごとに運動会→動画配信	
クリスマス会→クラス毎→保護者の参加は不可	保護者のサークル活動→すべて取りやめ。		
ボランティア活動→園内での活動はすべて取りやめ→ステージ発表会の衣装作成のみ。			

## 12月28日よりフェーズ「3」

12月14日に発表された内容では、保育・教育活動に関する規制は全く緩和されていない。「みんなで・一緒に・楽しく」という活動はすべて禁止の状態がこれからも続くと覚悟している。

### 結びに

3月末から4月初旬に都市封鎖策が発出され8か月、徐々に緩和されてきた規制は、国民の日常生活に関することと、海外との人の交流（これも厳しい条件付き）である。学校等の教育活動への規制はほとんど緩和されていない。

保護者とともに子供たち（とりわけ幼児期）の成長を喜び合うことは犠牲にしても「園内で確実に保育・教育をすべし」とのシンガポール政府の強い意志を知ることとなった。なぜなら、幼児教育への規制を緩和しても「経済効果」はないからであろう。失礼な表現になるが、指定ホテルで2週間の生活をすれば16万円ほどの負担が必要となる。これは受益者負担であり、観光業者に対し「経済効果」を生んでいる。

縷々現状を書き連ねてきたが、結びを述べるとすれば、以下の通りである。

ワクチンは特効薬との期待をしいののだろうか。世界がコロナ以前に戻ることを期待して待てばいいののだろうか。両親の社会活動を保証する幼稚園では「リモート保育・教育」はできない。「みんなで一諸に」という我が国の教育も、シンガポールでの規制（市中感染は皆無）を知れば、見直しを余儀なくされるだろう。

教育活動の萎縮やリモートの多用は、子どもたちの社会性伸長にどのような影響を及ぼすのだろうか。ウィズコロナの時代は、社会生活に劇的な変化を生むだろう。変化を求められるのは学校教育だけではない。大学時代、様々な体制に異議を唱えた学生集会の熱気を思い出す。シュプレヒコールやジグザグデモは昔話となるだろう。大人数を集めたライブも懐かしい思い出になるのだろうか。

さらに「決められない政府」と批判し、政権を奪還した「前・現政権」は、今回の対応では右往左往している。圧倒的な支持を受け政権を握り続けているシンガポール政府の現状を知るにつけ、自由・平等・民主・人権といった「多くの日本国民が支持していると思われる」体制に疑問を呈する国内の空気も感じてくる。

次々と施策を打ち出すシンガポール政府に対し、「どのような体制でも、政権が正しいことをすれば支持が集まる」との感想を述べる本園のスタッフ（日本人）がいる。

ニューヨークで知り合ったドミニカ共和国出身の友人は、世界を転々としてホテルマンとしての生活をしている。彼は未来の自画像を描けないようだ。

「15億の国民・56の民族を率いるためには、民主主義はそぐわない」という、北京の若きエリートや、チベットの旅行ガイド。強いリーダーを求めるようなヨーロッパの風潮。

もてはやされたグローバリズムの光と影、蜜と毒。リベラルであろうと自認している筆者が、この紀要を手にしてしている若き皆様に贈る言葉は、「強き個であれ」に尽きる。

### 自己紹介

1974年 農学部農芸化学科卒 1978年～東京都中学校教諭(理科) 2002～04年度、香

港日本人学校中学部校長（前後 3 校、都中学校長） 2013～14 年度、ニューヨーク補習授  
業校校長 2015 年 9 月～わらべ北京こども園園長 2020 年 4 月～現職